



Data

監督: クリス・サンダース
原作: ジャック・ロンドン『野生の呼び声』
出演: ハリソン・フォード/ダン・ステューヴンス/カレン・ギラン/オマール・シー

👁️👁️ みどころ

少年少女向けの冒険小説にこんな名作があったとは！「名犬ラッシー」以上の能力と体力、そして演技力を持った雄の大型犬バックにはパルム・ドッグ賞はもちろん、主演オス犬賞を！

もっとも、犬の一生は飼い主（ご主人さま）次第。本作中盤は、犬ぞりのリーダー犬として大活躍するバックの雄姿にハラハラ・ドキドキしたい。

タイトル通りの展開はハリソン・フォードおじさんが本格的に登場してからだが、そこに見る美しい白のメス狼を含めた「野生の呼び声」とは？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■こりゃ掘り出しもの！原作は？導入部だけでノッコン！■□■

1942年生まれハリウッドの名優ハリソン・フォードの代表作は『スター・ウォーズ』シリーズのハン・ソロ役や『インディ・ジョーンズ』シリーズのインディアナ・ジョーンズ役だが、ハッキリ言って、今や過去の人！？そんなじいさんが「伝説の冒険小説」の実写版に登場してきても、今さら・・・？そう思っていたが、何を観るか迷ったうえで本作を選択したのは大正解だった。こりゃ掘り出しもの！

私は子供時代に少年少女向けの冒険小説をすべて読破したつもりだったが、意外にも本作のことは全く知らなかった。本作の原作になったのは、アメリカを代表する作家の一人、ジャック・ロンドンが1903年に発表した伝説の冒険小説『野性の呼び声』。同作は100年以上にわたって愛され続けた、人類未踏の地に挑戦する男と犬の壮大な冒険と限りない友情を描いたものらしい。また過去に、①1923年にサイレント映画化され、②1935年にはクラーク・ゲイブル主演で初のトーキー映画化され、③1972年にはチャールトン・ヘストン主演で映画化されている他、1992年以降、何度もテレビ映画化されているようだ。

本作導入部では、ミラー判事（ブラッドリー・ウィットフォード）の大邸宅の中でご主人サマに可愛がられながら、まるで一心同体のように生活している大型犬バックの姿が描かれるが、バックの飼い主への忠実ぶりとやんちゃぶりを見ていると、それだけでも素晴らしい。犬が人間の言葉や感情をどこまで理解できているのか私にはよくわからないが、この導入部を見ているだけで、本作にゾッコン！

■名犬バックは名犬ラッシーや名犬リンチンチン以上！■

『再会の夏』（18年）は、第1次世界大戦における西部戦線の塹壕戦のある局面を描いた映画だったが、そこではレジオンドヌール勲章の武勲をたてた主人公の影に、2016年フランスで「一番美しいボースロン」に選ばれた名犬の存在があった。そのため、「愛犬」だけが真実を叫び続けた」というテーマの同作では、2人の名優の他にこの名犬の演技が大きなポイントになっていた（『シネマ46』掲載予定）。

他方、カンヌ国際映画祭にはパルムドール賞ならぬパルム・ドッグ賞がある。これは2001年にトビー・ローズによって企画され、以降毎年、優秀な演技を披露した1匹またはグループの犬に“PALM DOG”と記された革の首輪が贈られている。ちなみに、2019年には『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』（19年）（『シネマ45』137頁）の名犬ブランディが受賞しているが、2020年の同賞は本作の名犬バックで決まり！本作の名犬バックは、私が子供のころに大好きだったテレビドラマ『名犬ラッシー』や『名犬リンチンチン』以上の名犬だ。本作におけるバックの名演技の数々を見ていると、パルム・ドッグ賞だけでは不十分。新たにアカデミー賞に「主演オス犬賞」を設け、バックをその初代の受賞犬にしてもいいほどだ。

ちなみに、ラッシーは類い希な美しさと気高さを持ったラフ・コリー犬。これは毛足の長い豊かな毛並が特徴だ。また、リンチンチンは雄のジャーマン・シェパード。それに対してバックはセントバーナードとシェパードの雑種で雄の大型犬だ。

■棍棒は怖い！新しい飼い主は？一気にアラスカへ！■

もともと、いくら名犬だといっても、所詮犬は犬！食欲の前には理性を失う動物だと見えて、ある日バックはおいしい餌をちらつかせて犬泥棒を狙う悪人の手によって捕獲されてしまったから、大変。その結果、バックは檻に入れられたまま列車に乗せられ、温かい南方にあった大邸宅から、遠くカナダのユーコン準州に送られたうえ、棍棒で調教される毎日になってしまった。『スパルタカス』（60年）を観ていると、ローマ帝国に抑圧された奴隷たちが立派に「反乱」を起こしていたから、「やはり人間は偉い！」と思えたが、その点でも、所詮犬は犬。棍棒とムチによる調教の前には、バックといえども太刀打ちできなかったらしい。他方、『ゴールデン・リバー』（18年）（『シネマ45』112頁）では、カリフォルニアがゴールドラッシュに沸く風景が興味深かったが、カナダのユーコン準州もゴールドラッシュに沸いていたから、そこでは体力のあるそり犬は高値で売買されていたらしい。

しかし、機を見て逃走する能力だけなら人間以上の能力を持つバックは、ある日、厳重な警戒を潜り抜けて単身逃亡を決行！そしてバックは、欠員になった犬ぞりの犬を探していた郵便配達の人ペロー（オマール・シー）とその妻のフランソワーズ（キャラ・ジー）に買われたが、さてこの新しい飼い主はどんな男？そして、バックはどんな任務に？

■□■犬の運命はご主人サマ次第！善玉に飼われると？■□■

犬ぞりと聞けば、何よりもまず日本版『南極物語』（83年）の主役だった2匹のカラフト犬を思い出す。また、ハリウッド版『南極物語』（06年）は、鎖につながれたまま基地に残された8匹の犬ぞり犬の物語だった（『シネマ 10』 236頁）。同作で私は何よりも犬たちの人間以上の（？）団結力と利口さにビックリさせられたが、ペローに買われたことによってはじめて犬ぞりの任務に就いたバックは如何に？映画には、「これは善玉！」「これは悪玉！」とハッキリわかる人物を登場させることがよくあるが、本作は大人にも子供にもよくわかるデズニエーの冒険映画だから、それがとりわけはっきりしている。そして、最初にバックを買い、ミラー判事に続くバックの二番目のご主人サマになったペローは「善玉」だったから、ラッキーだった。

そんなバックと時々出会い、旧交を温める（？）のが、冒頭に少しだけ登場したものの、前半ではほとんど何の役割も演じないハリソン・フォード扮するソーントン。ソーントンは一人息子を失ったことがきっかけで妻とも別れ、今は深い絶望の中、一人で残りの人生を全うしているだけの老人だが、ひどい目に遭わされているバックの姿を見ると、つい手助けしてしまっただけ。もちろん、利口なバックはそんなソーントンの恩義をしっかりと感じ取っていたから、それが本作後半の物語につながっていくわけだが・・・。

■□■中盤に見る犬同士の権力（犬力）闘争にも注目！■□■

『ベンハー』（59年）のハイライトは、4頭立ての馬が引く馬車（戦車）での決闘だったが、犬ぞりは8匹の犬が引くもの。『南極物語』でも、8匹の犬ぞりのリーダーだったマヤから、最も若いマックスにその権力が移譲されていくサマが見事に描かれていた。それと同じように、本作でも当初は8匹の犬の最後方につながれていたバックだったが、次第に周りの犬の支持と尊敬を集める中、それまでのリーダー犬だったスピッツから嫉まれ、結局両者が頂上対決をせざるをえなくなるストーリーが描かれるので、それにも注目。

さらに本作では、その結果「次のリーダー犬は当然俺だ」とバックが自ら先頭に立とうとする姿が面白い。ペローはスピッツがいなくなった後の次のリーダーは、年功序列からすれば別の犬だと考え、バックを納得させようとしたが、バックはもちろん、ペローから指名を受けた犬もそれを納得せず、トコトン拒否するシークエンスが面白い。犬社会とはいえ、犬の自治いわば民族自決の意思を尊重しなければならないということだ。そして、洩々ペローがバックをリーダー犬に指名すると、これが大成功。多少暴走気味（？）などところも含め、バックがリーダー犬に就いたことで、1度も定刻通り配達できていなかった郵便物が定刻通りの配達となったから、ペローはもちろん町の人々も大喜びだ。

張藝謀（チャン・イーモウ）監督の名作『活きる』（94年）（『シネマ 5』 111頁）のテーマは、「人間、万事塞翁が馬」だったが、大陸横断鉄道の開通に始まった列車事情の急速な発展によって産業構造が大きく変化し、犬ぞりによる郵便配達は無視されてしまったから、ペローも廃業せざるを得なくなり、バックも失業者（犬）になってしまうことに。しかし、バックの次のご主人サマは誰に？

■□■「悪玉」の飼い主に買われると、犬の一生は最悪！■□■

カナダのユーコン準州にある町は、いくらゴールドラッシュの時代とは言えまだ小さいから、ペローが失業しバックが用済みになってしまうと、すぐにバックの買い手として登場したのが、犬ぞりの扱い方もろくに知らないクセに砂金集めだけには目をぎらつかせている男ハル（ダン・スティーヴンス）と、その姉のマーセデス（カレン・ギラン）だ。『南極物語』を観ても、本作におけるペローの姿を見ても、犬ぞりの操縦が難しいことはすぐにわかる。また、雪の上はともかく、氷の上を走る時は氷の厚さをしっかり確認しなければ命に危険が及ぶことは、ペローの妻フランソワーズが氷が割れたために水の中に転落し、死にかけた情景を見ても明らかだ。

ところが、ハルにはそんな知識は全くないうえ、犬の体力や気持ちを全く理解しようとしなかったから、彼が使うのはいつも鞭と棍棒ばかり。『風と共に去りぬ』（39年）では、レット・バトラーと別れたヒロイン、スカーレットは、黒人メイド1人を連れて馬車に乗り、やっと故郷タラにたどりついたが、馬の命はそこでアウトになっていた。それと同じように、ハルによって働きづめに働かされたバックは今や青息吐息状態だ。さらにハルはそんなバックに鞭を打ち、ソーントンの目には明らかに氷の薄い危険な方向へ犬ぞりを走らせようとしていたから、彼は矢も盾もたまらずバックを救い出すことに。自分の犬をどう扱うかは基本的に所有者の自由だから、ソーントンがこんな形で介入したのはいらいらのお節介。したがって、彼の登場にハルが大いにむくれたのは当然だが、それによってバックは命拾いし、以降ソーントンとともに過ごすことになったから万々歳だ。

「悪玉」の飼い主に買われると、犬の一生は激変することを実感！

■□■後半からやっと『野性の呼び声』のストーリーに！■□■

本作前半ハリソン・フォードはほんの少ししか登場せず、バックがそり犬になるまでの人生と、ペローという善玉のご主人サマに恵まれた後の、魚が水を得たかのような大活躍を描いていく。したがって原題を『The Call of the Wild』、邦題を『野生の呼び声』とした本作（本来）のソーントンとバックによる冒険の旅は、後半からやっと始まっていくことになる。“世捨て人”のようにになっていたソーントンが再び冒険の旅に出ようと決心したのは、息子が大切にしていた地図を発見したため。どうやら息子は、その地図にも載っていない未知の土地に行きたかったらしい。そんな未知の地へ息子に代わって俺が行くことができたなら……。ソーントンはそう考えながらも、自分の年齢を考えて躊躇していたが、バックと一緒に過ごす日々の中、「いくつになっても最強の相棒さえいれば最高の冒険がで

きる。」、ソートンはそう確信することに。

もつとも、1848年1月に起きたゴールドラッシュによって、一躍サンフランシスコが大都会に変身したことは『ゴールデンリバー』で明らかだが、ソートンが今住んでいるアラスカでも砂金ラッシュが起きていた。ソートンが目指す土地はさらにその先であるうえ、砂金を求める旅ではないが、かつてバックのご主人様だった悪玉のダンもその他大勢の男たちと同じように砂金を求めてアラスカを目指していたから。ひょっとして、ソートンとバックはそんな悪玉ダンとの望まない再会があるのでは・・・？そんな不安をばらみつ、ソートンは今カヌーを操ってバックと共に川を下り、全く未知の地への冒険の旅に。

そんな中、バックが時々見かけるのが白い美しい犬だが、ひょっとしてこれはメスの狼？そして、ひょっとしてバックはこの白のメス狼に一目ぼれ・・・？

2020（令和2）年4月10日記